寄禁中戀

知るらめやよるのおとゞのともし火の晝さへけたぬわが思とは

寄杜戀

幾年かかけしいのりもかひぞなきあはでなげきの杜のしめ繩

寄徑戀

名殘あれやかはす言葉の程もなき道ゆきぶりの袖のわかれは

寄淵戀

しづむ身のゆくへやいかに逢ふことの猶かたぶちの深き思に

寄夢戀

逢ふと見し夢はさめぬる閨の内につれなく殘すともし火の影

寄暮春戀

ゆく春のわかれにそへてきぬ〴〵のなごりをしたふ有明の月

寄稻妻戀

きてもそのかげだにとめぬたぐひにもうしや枕にかよふ稻妻

寄晝戀

頼めおきて暮まつ程もいかならむ露のひるまもたへぬうき身と

寄石戀

よりもこぬ心づよさとひきみるも千引の石のうごきなくして

寄柱戀

知れかしな閨へも入らでまきばしら獨よりそふ宵のおもひを

寄簾戀

袖の香もまがはぬみすの追風をなほ身にしみて慕ふすきかげ

寄苫戀

わが袖のたぐひとを見よ秋田もるかりほの苫の露もしぐれは

寄手向戀

旅ならぬ戀のみちにも手向してかへりあふせや神にいのらむ

寄藻戀

思ふかひ波のよる〳〵身をうみの蜑のかるもの亂れわびつゝ

寄沼繩戀

思のみますだの池のうきぬなはうきにいつまで亂れわぶらむ

雜部

天象

あきらけき神代のまゝに月日星くもらぬ天のみちぞたゞしき

朝雲

山ぎはにむら〳〵雲のたちまよふ空もしづけき朝ぼらけかな

曉

あけぼのゝ光もうすく見るがうちに山の端しらむ東雲のそら

曉鷄

ありあけの月かげしらむ山もとの里にかずそふ鳥のこゑ〳〵

曉天鷄

おどろかす鳥の初音におきなれて夜深くいそぐ朝まつりごと

曉燈

月かげもかたぶく西の窓のうちあかつき深くのこるともし火

山家

櫻町天皇

軒ちかくこづたふ猿も友がほになるゝみ山のいほのさびしさ

山家風

しづかにと思ふには似ぬあらしにもたへて馴れぬる山の下庵

山家木

世はなれしわが山住のとしを經て軒端の松のかげもふりぬる

山家友

世離れてすむ山ながら年をへてなるればなるゝ友もありけり

山家夢

しづかにと思ひ入りぬる山に見ば夢もうき世に通ふとやなき

山中瀧音

みなかみはそことも見えず山ふかき雲にとゞろく峰の瀧つ瀬

田家

夕日さす田面は晴れて軒にほすいなば色こきさとのひとむら

原本題闕く、

せき入れし昔のあとゝ今もその名にながれてや殘るたきつせ

田家雲

里とほみけぶりのすゑに一むらの雲もしぐるゝ小田の夕ぐれ

田家煙

煙たつたみのかまどの賑ふと聞くをわが世のたのしみにして

草庵

思ふにもさぞないぶせき露霜をしのぐばかりの草のいほりは

河

櫻町天皇

底きよみたまもにあそぶいろくづも見えてすゞしき夏の川水

海村

蜑人のすむだにまれの須磨のうらこゝろぼそくも立つ煙かな

木

花もみぢ柳もあれどまりの庭あかぬときはのまつの木のもと

岡松

時雨には染めぬ岡べの松が枝をかぜこそ秋のおとは立てけれ

浦松

夕潮にくもると見えてよる波のいそぎはくらき松のむらだち

さかえゆく陰や幾千世とことはにみどりふりせぬ和歌の浦松

わが國の神代のかぜの言の葉もつきぬためしやわかのうら松

江松老

みづがきや年も津守のうらさびてかげふりにける住の江の松

松爲友

をりへけむ松も若えてこの洞にともなふ千世は我ぞかぞへむ

松有歡聲

あしたづもむれゐて遊ぶこの洞に千世をとなふる松風のこゑ

澗槇

谷ふかく日かげももらで露霜に葉かへぬまきの色ぞつれなき

竹露

たちわたるそともの霧のあさぼらけとへばつゆけき竹の下庵

砌竹

枝しめて梧にすむてふ鳥もいま見ばやみぎりの竹のうてなに

山館竹

山かぜのそよとも人に知らるなようき世のがれし窓のむら竹

谷竹

たれこゝにうゑていく世かくれ竹のみどりをひたす谷川の水

竹有佳色

色かへぬ竹のよろづ代かくて見よなほきに民の靡くすがたを

椎柴

そめ〳〵し木々は落葉の冬がれにのこるもさびし峰のしひ柴

山かげに落つる木の實も音そへてあられみだるゝ峰のしひ柴

岸忘草

世のうさを忘るゝ草も岸に生ひてげに住吉の名こそしるけれ

庭鶴

わが友と雲居の庭にいくちよもかさねてみばや鶴の毛ごろも

浦鶴

松かげにむれゐる田鶴も諸聲に千世とやよばふ和歌のうら松

鶴立洲

うつすともえやはおよばむ葦たづの洲崎にむれてあそぶ松蔭

鷺

たづならで鷺も千とせや松にすむ霜の毛ごろも雪のしろかみ

江鷺

夕立は晴れぬる水のにごり江にいをもとむとやたてるしら鷺

河鷺

ゆく水もきよきなぎさにゐる鷺の蘆間に見ゆる色のすゞしさ

樵夫

あはれなりさも苦しげにはる〳〵とたきゞ負ひつれ歸る山人

樵歌入山

ましばとる道のをざゝの一ふしをうたひつれつゝわくる山人

浦舟

幾千里ゆきかふ浦の舟路にもなみしづかなる世をや知るらむ

眺望

わだのはら見わたす末の雲はれて朝日いざよふおきつしら波

波の上にひたす夕日のうらかけてうすくれなゐにそむる海原

高殿のすだれみじかくまきあげて向ふそなたに晴るゝ山の端

夕日さす田面のすゑをながむれば山の端わたる鷺のひとつら

野眺望

煙立つ山もとかけて夕まぐれ見わたす野邊のすゑのはるけさ

海邊眺望

わだのはら波路のすゑをながむれば雲に消えゆくあまの釣舟

名所山

たちまよふ雲より上にあらはれてくまなく向ふ雪のふじのね

神代より吉野の川もなかに落つる妹背の山の名こそたかけれ

名所嶺

よそめにもはるかにかけて葛城のたかまの峰に雲ぞ見せける

名所杣

宮木ひく聲もあらしにたかしまのみをの杣山みねとよむらむ

名所橋

見わたせばたぐひもなみの末とほみくもゐにつゞく天の橋立

名所渚

藻鹽草かずかきつめて和歌の浦に今もなぎさの玉やひろはむ

名所市

をしめたゞあだに月日は辰の市にうるわざなくてすぐる齡を

名所松

散りうせぬためしぞ久し和歌の浦やわが世につもる松の言の葉

志賀浦

かすみしく志賀のうらわの朝なぎに花の香おろす比良の山風

春日野

ところがら春のひかりに雪とけて若草あをむかすが野のはら

伊勢海

朝なぎにみるめのどけし貝ひろふ伊勢男の蜑の袖もかすみて

由良御崎

のどかなる由良のみさきの朝なぎに霞かゝれる紀路のとほ山

末松山

波かすむありあけの月の名殘あれや春もやよひの末のまつ山

難波浦

若葉そふあしべのどかに津の國のなにはの浦のかすむ夕なぎ

小倉山

秋ふかくなりにけらしな小倉山木の葉いろづき鹿ぞなくなる

御裳濯川

神かぜやみもすそ川の月かげにかけてすゞしき波のしらゆふ

石瀬杜

ちらすなよはかなき風をたよりにていはせの杜の露の言の葉

清見關

清見がた關ふきこゆる秋かぜにかたしくなみの月のさやけさ

浮島原

不二のねの雪はくもらで一とほりしぐるゝ雲のうきしまが原

伏見里

いつまでかまた逢ふ夜半もかたゝ絲の伏見の里の名を歎かまし

旅

いとゞしく都の空のこひしきはなれにし人やおもひいづらむ

羇中里

旅ごろもかへしてやみむ故郷をこよひふしみの夢のまくらも

羇中湖

あふさかの關こえてゆく旅人やめづらしと見る志賀のうら波

羇中嶺

今日もまた越えゆく山の峰たかみさながら雲をふむ心地して

羇中關

旅人もおもふや三の關の戸もとざゝでひさにをさまれる世を

ふりすてゝ越ゆるうまやの鈴鹿山さやけき月のよるの關路を

羇中泊

かぢまくらなるゝ波にも故郷のおもかげうつす月のあはれさ

旅宿夢

旅まくら夢にも見えてふるさとに待つらむ人のこゝろ通はゞ

風破旅夢

見る夢もいくたびあだにさそふらむなれぬ旅寢のとこの山風

野行幸

芹川や千代のふる道ふるき世のみゆきのあとも今たづねみむ

窮窕隔簾談

言の葉はかはしても猶ゆるしなき母屋の簾のうきへだてかな

妓女對鏡

たをやめの鏡のかげもたのむなよ常にうつろふ花のかほばせ

楊貴妃

枝かはし羽をならべむちぎりこそなか〳〵ながき恨なりけむ

寄衣雜

おもふぞよわが衣手のあそぶにもなほ國民のうへやいかにと

御夢想和歌

あなたよりこなたへなびく九重の松にちとせの春をちぎらむ

宴遊

花のあした月の夜ごとのまどゐには三の筵にしくものぞなき

宣命

櫻町天皇

みことのりのぶる雲居にもろ臣のそでをつらねてあふぐ萬代

神祇

あまてらす神ぞ知るらむすゑながき代々の日嗣をいのる心は

曉神祇

玉がしは白酒黒酒をうちそゝぎにひなべまつるあかつきの空

瑞籬

五十鈴川したつ岩根のみづがきのながれ久しき末もうごかで

伊勢

うごきなき下津岩根のみやばしらいくよふりぬる五十鈴川波

三輪

あとたれし神代のまゝに三輪の山宮居つくらぬ杉のむらだち

述懷

かしこしな神代のまゝに皇神のめぐみつたふるあまつ日嗣は

國ながくをさめし神の跡とめてかはらぬ代々の事をしぞ思ふ

つたへこし道をきはむる名はすぎて學びえぬ身を恥づる言の葉

百敷やその言の葉もふりし世をしのぶの露はそでに落ちつゝ

月花をこゝろのどかにながめつゝ千世もへぬべき雲の上かな

思ふにはまかせぬ世にもいかでかはなべての民の心やすめむ

獨述懷

民すらにあはれかけよと思ふぞよ治むる四方の國のつかさも

寄春述懷

風ふかぬ雲居の春の十年あまりあはれのどけき花も見しかな

寄道述懷

何ならぬ言の葉をのみ恥づるぞよ道を傳へしその名ばかりに

寄月述懷

あきらけき光もそはむ君が代をくもゐの月にいのるゆくすゑ

夢中懷舊

幾たびか見しが中にもたちちねのいさめかしこき夢ぞ忘れぬ

水石契久

にごらじなしたつ岩根のうごきなき流れもいよゝいすゞ川波

幸逢太平代

五十鈴川すめる流れをつたへきて波たゝぬ世の春のうれしさ

寄天祝

めぐみ思ふ天津日嗣もひさかたの光とともに世をてらさなむ

寄神祝

よろづ代と神もさこそはまもるらめわが敷島の道のさかえを

寄道祝世

おしなべてすなほなる世もさかえゆく言葉の道の光とぞ思ふ

寄道祝言

しきしまや傳ふる道も神代よりかけてたえせぬあまのうき橋

寄松祝

つたへきてさらにぞ仰ぐ住の江の松の言の葉つきぬためしを

寄竹祝

もゝしきや神代の風をうつしうゑてふりせぬ竹の音のさやけさ

高

大比枝を見てもぞ思ふ二十ばかり重ねあげたる富士はさぞなと

多

もゝしきや百の司のまつりごとあまたの道もなべてたゞしき

清

わが心すが〳〵してふ跡とめていまも八雲のみちはけがさじ

〔以上櫻町院御集〕

延享元年上元につき

治まれる民のつかさのまつりごと昔のまゝにかへるをも見よ

同年十月家重公將軍宣下之節

民草になさけの露をかけよかし四方をまもりの國のつかさは

〔以上見聞隨筆〕

桃園天皇

三月三日　立春風　寶暦十一年

日ののぼる高嶺よりけさ吹きそむる風長閑にて春はきにけり

四日　霞始聳

日にそひてたちかさぬらし見そめぬるけさの霞のうすき衣手

五日　野邊霞

草はみな去年みしまゝの野邊もなほ春としられて立つ霞かな

六日　田若菜

賤の女がすむ庵ちかき小山田にもゆる若菜をまづや摘むらむ

七日　巖殘雪

春きてもなほ風さゆる山かげのいはほがうへにのこるしら雪

八日　待鶯

かすみゆく千里の春にうぐひすの初音を待たぬ人やなからむ

九日　暁更梅

さく花のにほひながらにありあけの月もかすめる窓の梅が枝

十日　夕梅

夕月夜たちえはそことわかねどもにほひまがはぬ梅のした風

十一日　柳

春いく世くりかへしみむ佐保姫のてびきにそむる青柳のいと

十二日　磯春草

波よするいその松かげ雪きえて春のみどりに生ふるわかくさ

十三日　江春月

みるめ猶たぐひもなみのたまつしま入江のどかにかすむ月影

十四日　去鴈遙

歸るさのなみをぞ思ふ見るがうちに遠ざかりゆく天つ鴈がね

十五日　尋花

まだき咲く花やあらむと分けぞ入るあまたこのめも春の山路に

十六日　初花

あかず猶いく日もめでむ咲きそむる雲居の庭の花のしたかげ

十七日　花留人

よそに見てえぞ過ぎやらぬみちのべや盛の花のあかぬ色香は

十八日　雨後花

よるの雨のなごりえならぬ色そひてにほひこぼるゝ花の朝露

十九日　落花

吹くとなき風にも今日はさそはれて花の白雪つもる木のもと

二十日　蛙

くれふかくかすめる遠の川水にすだくかはづの聲のしづけさ

廿一日　欵冬

えもいはぬ色とこそ見れ夕露に咲きそふ庭のやまぶきのはな

廿二日　春欲暮

やよひ山花ものこらぬ高嶺をやいつしか春のこえむとすらむ

廿三日　首夏藤

松が枝になつかけて咲く藤の花すぎにし春のかたみとや見む

廿四日　餘花

外のちる後とやさけるなつぎくものこるみぎりの花の一もと

廿五日　新樹

あかず見む青葉木ぶかくしげりあふ中に楓のうすきみどりは

廿六日　葵

神まつるそのかみ山のあふひ草いく世かはらぬ二葉なるらむ

廿七日　里郭公

時鳥いつまでとなくさとの名のしのぶ初音はなほまたれけり

廿八日　市郭公

ほとゝぎす騒ぎてたつの市場にもきゝうる聲や何にかふべき

廿九日　橘

わがむかふ南の殿の軒端よりかをる香あかぬかぜのたちばな

三十日　池菖蒲

刈らで見む水の夕風かをる香もすゞしくしげる池のあやめは

四月一日　朝早苗

かずあまる葉のぼる露も見えてけさ涼しくなびく小田の若苗

二日　夏月涼

涼しさのあかずもあるか待ち出でゝ端居にむかふ月の小夜風

三日　鵜河

五月やみむかふ夜川のをちこちに鵜舟のかゞりてらす涼しさ

四日　蓮

さゞ波のこゆるゝと見れば露の玉まろぶもすゞし池のはちす葉

五日　氷室

こゝにのみ吹く風すゞし氷室山なつなき谷の木々のしたかげ

六日　野夕立

きほひきて道をぞいそぐとひよらむ木蔭さへなき野邊の夕立

七日　螢

秋をまつ露かと見えて草の葉にすがるほたるぞひかり涼しき

八日　殘暑

秋きぬと何にかわかむ朝つゆもひるまのあつさ夏にかはらで

九日　待七夕

秋はきぬ今いく日ぞとあふ夜半をかぞへて星や空に待つらむ

十日　山家荻

秋風のふくおとさびし山ざとにのきばの荻のたえずそよぎて

十一日　萩

ゆきてみむ今もえならず咲く萩の名にたかまどの野邊の盛を

十二日　薄

秋の野の千草がなかにこゝかしこまねくや風の尾花なるらむ

十三日　蘭

野邊とほく分けきてよれば藤袴いろなつかしくさけるこの頃

十四日　竹露

霧こむるまがきの竹の枝たれてなほおきあまる今朝のあさ露

十五日　秋夕雨

ながめわびぬ梢もわかぬ霧のうちに小雨ふりいづる夕暮の空

十六日　蟲怨

眞葛葉のうらみにたへず鳴く蟲をあはれとぞ聞く秋のさよ風

十七日　鹿聲幽

吹きおくる嵐にたぐふ聲さへも猶ちかゝらぬ野邊のさをしか

十八日　鴈

いにし春きゝしにも猶かはらねど鳴くなる鴈の聲はめづらし

十九日　駒迎

いにしへのためしをひきて雲の上の秋にいつ見む望月のこま

二十日　待月

暫し猶またれてこそはとばかりに月や高嶺をいでがてにする

廿一日　月契秋

千里にも見るため月や小夜ながき秋を契りてひかり添ふらむ

廿二日　翫月

秋いくよさやけき月をもてはやすわが大内のやまとことのは

廿四日　見月

てらせ猶おもふ友どちまどゐして見るかげあかぬ秋の夜の月

廿五日　惜月

あかずなほながむる西の山の端にかたぶく月の影をしぞ思ふ

廿六日　擣衣

しづがやの軒をならべて衣うつきぬたの音もしげきこのごろ

廿七日　黄葉

木々は猶そむると見るもうすく紅葉秋ふかくなる色ぞまたるゝ

廿八日　暮秋霜

淺茅原やゝうらがれておく霜もふかくなりゆく秋のくれがた

廿九日　山初冬

落葉せぬときはの山も冬きぬとふく音かはる木々のあさかぜ

五月一日　時雨

程もなくかたへは晴るゝ夕日かげしぐれの雲のたちまよふ空

二日　殘菊

ちらで猶色そふ霜のしらぎくは冬もまがきにめづるひともと

三日　橋落葉

吹きわたる河かぜ見えてちりつもる紅葉のにしきたゝむ岩橋

四日　冬夕風

入相のかねのひゞきも身にぞしむこの夕かぜのさえくらす空

五日　氷

きのふまで岩根ばかりと見しも今朝のこる方なくこほる池水

六日　寒月

冬がれの草葉の霜もしろたへのひかりをかはす月のさむけさ

七日　千鳥

むれて啼く聲はさだかに聞きてしも行方わかぬさよ千鳥かな

八日　鴨

なつみ川山かぜ寒くふくるよにうきねの鴨やわびて鳴くらむ

九日　網代

あじろもる床さむからし衣手のたなかみ川にしも夜かさねて

十日　霰

山かぜにさそふあられの玉はやすよそめもさむき夕ぐれの庭

十一日　湖雪

志賀の浦やさゞ波かけて雪誘ふ比良のねおろしさゆるこの頃

十二日　篠雪

吹きさやぐ夜のまの風の音たえてけさしら雪のつもるさゝ原

十三日　向爐火

さむさをもむかふがうちは忘られて春をおぼゆる埋火のもと

十四日　關歳暮

逢坂の關もる人もとゞめあへずくれゆく年の名殘をやおもふ

十五日　忍戀

うちいでむことしもかたき石の火の中の思をつゝむくるしさ

十六日　見戀

見しは猶さだかならぬを夢かともたどらでしたふ人の面かげ

十七日　不逢戀

あはじとはいはぬを中のたのみにて猶ながらふる年月ぞうき

十八日　尋戀

心あてに思ふあたりはとひきてもそこと定かにしられぬぞうき

十九日　契戀

おぼつかなわがわすれじの心より人もさこそとちぎるゆく末

二十日　逢戀

新枕まちえてかはす今宵よりよをへだてじとちぎるうれしさ

廿一日　別戀

したふぞよまたいつかはと思ふにも名殘つきせぬ今朝の別を

廿二日　後朝戀

わかれきて今朝のまたねの袖になほのこるをしたふ人の移香

廿三日　顯戀

たれかいつ見あらはしけむしのびこし思のつゆのかゝる袂を

廿四日　近戀

まぢかくもすむかひなしや蘆がきのうきふししげき人の心に

廿五日　馴戀

知れかしな明暮なほもへだてなくなるゝにつけてまさる思を

廿六日　不憑戀

末遠くいかゞたのまむたのみてもうはべばかりの人のなさけは

廿七日　悔戀

たのみしも今更くやし人ごゝろかはらむはてを思ひはからで

廿八日　久戀

幾とせか袖をぞぬらすなみだ川いまもかはらぬ人のうきせに

廿九日　忘戀

はかなしやなさけも今はうき中のわすれがたみに殘る言の葉

六月一日　曉

見し夢もさめゆく閨のたまくらにあかつきしるく鐘ひゞく聲

二日　薄暮

ゆふづく日うつろふと見し色きえてくれゆく空になびく浮雲

三日　松歴年

十かへりの花もまちみむ年をへてかげいやたかき庭の松が枝

四日　里竹

すなほなるすがたを友と誰もかくうゑおくならし里のむら竹

五日　山館煙

世はなれてすむ山窓のあけくれにたつる煙ぞよそめさびしき

六日　瀧水

くりかへしたえず岩根におちくるや幾世をふるのたきの白絲

七日　田家

にぎはふと聞くぞうれしき小山田のよもにかずそふ民の家々

八日　故郷雨

すみしよをしのぶ草生ふる故郷の軒端にそゝぐ雨のしづけさ

九日　旅

いでしわがふるさとちかみ乗る駒も心もいさむ旅のかへるさ

十日　猿

きこりさへとはぬ深山に所えてすめるやあまた猿の鳴くこゑ

十一日　鷺

ゆく方を見ればはるけき江の水にやがてもあさる鷺の一つれ

十二日　島鶴

わだのはら波路へだてゝ鳴くたづの聲もはるけきおきの遠島

十三日　野風

しげりあふ草葉おしなみはるゝ〳〵と吹く風みする武蔵野の原

十四日　夢

慕ふぞよしばしぬるよの手枕に見はてずさめし夢のゆくへを

十五日　祝

末遠くさかゆる松のことのはのたえせぬ道は千とせよろづ代

〔以上公宴御着到百首和歌〕

後櫻町天皇

名所花

よしの山いやかさなれる雲と見む花より花のさきつゞくころ

河欵冬

ゆく河のみなそこ清みえもいはぬ色をうつせる岸のやまぶき

〔以上明和三年公宴御會披書〕

明和二年八月十六日御會當座

十六夜月

さやけさは昨日の影にかはらずも待ち出でゝ向ふ十六夜の月

同六年正月廿四日公宴御會始

鶯有歡聲

幾千代の春をちぎりて聞きはやす初音うれしき宮のうぐひす

同七年春公宴御會始

迎春祝代

諸人もひとつごゝろに祝ふ世のゆたけさ見えて春のたのしき

天明三年正月廿八日公宴御當座

花漸盛

今朝より□さかりとぞ見る櫻花きのふにまさるえだの色香に

同年二月二日仙洞和歌當座御會

鶯知春

春といへば柳さくらのにしきこそ聲のあやなす園のうぐひす

同四年九月仙洞御庭の紅葉につけて九條尚實に給はせける

染めそはゞ木蔭をとへと一枝をまづ見せそむる庭のもみぢ葉

安永八年正月十八日仙洞和歌御會始

鶯花契萬春

萬代と梅にもちぎれこの春のもゝよろこびを告ぐるうぐひす

〔以上見聞隨筆〕

後桃園天皇

明和六年正月廿四日公宴御會始

鶯有歡聲

九重のみぎりの松にうつり來てちとせをちぎるうぐひすの聲

同七年春公宴御會始

迎春祝代

長閑なる春を迎へてさま〳〵の道さかえゆく御代ぞにぎはふ

安永五年正月廿六日公宴御當座始

早春鶯

いとはやも春を告げてや我が園にけさ長閑なるうぐひすの聲

〔以上見聞隨筆〕

光格天皇

寛政三年二月十八日　和歌御會始

竹樹有嘉色

さかえよと緑のほらの松と竹なほゆくすゑの千世もこめつゝ

四月十八日　月次御會

月前卯花

くれぬまは雪を見せにし卯花のかきねさやかに月ぞてりそふ

浦眺望

浦とほみ朝日いざよふ波のうへに木の葉と見るはあまの釣舟

五月十八日　月次御會

夏木

ありしにもまさりてにほへ露の玉みがく砌にさけるたちばな

夏草

しげりそふ野もせの草の緑なるなかに色わくさゆりなでしこ

七月十八日　月次御會

淺茅蟲

秋はいまだ日數あさぢの露をはやよすがとや鳴くむしの聲々

名所旅

旅のうさも忘れてぞゆくふじの雪田子の浦わにたち眺めつゝ

八月十八日　月次御會

洛陽月

名どころのいづくの秋もおよばじな都に月のてりまさるかげ

秋逢戀

わが中は露かはるなよあさがほの花の色なるならひありとも

十月十八日　月次御會

薄氷

さえし夜のあらしも見えて今朝ひとへ凍りそめたる庭の池水

戀鳥

まつにかこちあふ夜に恨む鳥の聲心よりしも憂しときくかな

十一月十八日　月次御會

庭上冬月

霜雪のひとついろにもくもりなく月かげみがく庭のまさごぢ

田家路

をりすぎてしづがいとまの田面にもゆきゝはたえぬ畦の細道

寛政四年正月十八日　和歌御會始

子日祝言

ほらの春につきぬためしや折にあふ今日の子日の松の言の葉

二月十八日　月次御會

白梅

ながめあかずくれぬる後は月雪のひかりにまがふ庭の梅が枝

紅梅

はしちかくうゑていく春見はやすも色そふ梅の花のくれなゐ

後二月十八日　月次御會

春鳥

かすみ立つ空にもたかくたつ雲雀小草さく野はきゞす鳴く聲

春筵

をりしもあれ風のしきたる花の雪寒からぬをぞ春のさむしろ

四月十八日　月次御會

待郭公

一聲をもらせ雲居のほとゝぎすしのぶ卯月のゆふべあけぼの

琴調

さま〳〵にかきならす琴のしらべ猶そへてぞ通ふ夜半の松風

五月十八日　月次御會

瞿麥帶露

おきむすぶ露の光もたまと見えにしきをしけるとこなつの花

寄水鶏戀

たのめてしその音づれを松の戸にまたぬ水鶏の叩くあやなさ

七月十八日　月次御會

尾花

秋風のふくより野邊の花すゝきほに出でゝ招く袖のしろたへ

旅戀

はるゞ〳〵とゆく末いかに旅ごろも戀のやつれも日數かさねて

八月十八日　月次御會

鹿聲幽

かすかにもそれかとばかり野邊遠み風のつてなる小男鹿の聲

秋眺望

木々の色もいそげ朝夕たつ霧にながめことなる秋のやま〳〵

九月十八日　月次御會

遠樹紅

うてなよりむかふ野山のこゝかしこあきを見せたる木々の紅

寄菊契

契るぞよ咲きにほふ菊の千世の秋つきせぬ時を中のためしに

十月十八日　月次御會

殘菊留秋

霜がれはまだしら露のきくの花いろにも香にも秋をとゞめて

漁父出浦

朝なぎにおくれさきだちこぎ出でゝ浦づたふらしあまの釣舟

十一月十八日　月次御會

浦千鳥

さかえゆく和歌の浦わの友千鳥松のねにたてやちよとぞ鳴く

祈逢戀

年月にいのるかひある貴船河あふせのなみのそでにかゝるも

十二月十八日　月次御會

雪中松

今朝見ればときはの松も冬さむみ緑のうへにゆきふかくして

雪中鶴

千世の色に見えてゆたけし白雪をかさねかさぬるつるの毛衣

寛政五年正月十八日　和歌御會始

南枝暖待鶯

日のめぐる枝にさへづれうぐひすの初音を松の言の葉のたね

四月十八日　月次御會

遅櫻稀

ほかのちる後にとさけるおそ櫻青葉木ぶかきなかにまじりて

見増戀

ぬれそふる袂くるしきあま衣みるめをなかのたのみきつゝも

五月十八日　月次御會

五月郭公

五月きぬ山時鳥おのがときとをちかへりなく夜な〳〵のこゑ

橘花盛

このごろのさかりは昔しのぶにもあまりて匂ふ軒のたちばな

六月十八日　月次御會

松下水

見るにあかず涼しかりけり岩根水風かよふ松の影もうつりて

閑中燈

誰かすむ窓の螢のそれならでしづけく見ゆるともし火のかげ

七月十八日　月次御會

尋蟲聲

野をひろみたづぬるかたは聲やめてよその草根に松蟲のなく

寄薄戀

花すゝきほに出づる戀も秋風にいとゞこぼるゝ袖のしらつゆ

八月十八日　月次御會

釣夫棹月

さをさしてこぎ出でながらめづる月に釣のいとまや蜑の友舟

田家眺望

鳴子ひく音にそなたとむかふ田の稲葉のおくのしづがかり庵

九月十八日　月次御會

龍田山秋

秋ふかき梢のにしきかさねかけて名にも立田の山のもみぢ葉

阿波手杜戀

年ふれどあはでの杜のあはでうき思のつゆはいつかかわかむ

十月十八日　月次御會

待雪

あさな〳〵峰にのみ見るしら雪のこゝに積るを猶またれつゝ

巖苔

千世に千世かさねきぬらし苔衣松かげふかくたてるいはほは

十一月十八日　月次御會

月光映水

照しあふも寒けき池のひもかゞみ月のよな〳〵影をうつして

寄千鳥戀

友したふ千鳥の聲もわが中のうきにたぐへてきくとしらずや

十二月十八日　月次御會

年内梅

いろは雪かをりは春にへだてなく年のうちよりさける梅が枝

年内鶯

春ちかき軒端の竹にふしなれて聲のどかにもうぐひすの鳴く

寛政六年正月十八日　和歌御會始

洞庭松久

この春に千世の色そふほらの松つきぬ言葉のさかえしられて

二月十八日　月次御會

朝春草

朝風はまだ袖さむくわくるにもみどり春しる野邊のわかくさ

名所鶴

松になれ蘆間に見るもゆたけしなかすめる春の和歌のうら鶴

三月十八日　月次御會

桃花曝錦

春がすみたちそふこずゑむら〳〵のにしきめがれぬ桃の花園

互契戀

つゝゐづゝふりわけ髪の末ながき契はつきぬいもせなるらし

四月十八日　月次御會

ほとゝぎす

忍ぶてふ卯月もなかばすぎぬとやこの頃もらす山ほとゝぎす

まがき

しめゆひし草のまがきは春秋のいろをこめたる花のさくらし

五月十八日　月次御會

薄暮水鷄

黄昏にたど〳〵しくや眞木の戸をたゝく水鷄のそこと定めず

寄枕忍戀

夢ならで何なぐさまむまくらよりまたしる人もあらぬ思ひは

六月十八日　月次御會

夕立

むら雲のみちふさがると見るがうちに晴るゝも早き夕立の空

蘆

言の葉のしげる難波のよしあしに迷はじとのみ思ふあけくれ

九月十八日　月次御會

濱菊

よそめには波とまがへて濱かぜのさそふ香あかぬしら菊の花

增戀

おもへどもおもひは年にますかゞみ戀のやつれも心づからと

十月十八日　月次御會

葉落水紅

心あれやよそにちらさで池水に秋のにしきをひたすもみぢ葉

風竹如雨

まどの月かげくもらねど雨の音にいくたびまがふ竹のさよ風

十一月十八日　月次御會

河網代

氷魚をまつ河瀨のかゞりそれならで月も影さす宇治の網代木

顯戀

あらはれて今はたいかになにはがた蘆のひとよのかりの枕に

後十一月十八日　月次御會

月照山雪

しろたへの雪のひかりにかゞやくを猶みがきそふ山の端の月

雪松樹花

十かへりの花とみぎりの松の雪こずゑ下枝のけぢめわかれで

十二月十八日　月次御會

爐火似春

さながらに春をおぼゆるそらだきの梅が香そへてむかふ埋火

海邊朝

うちむかふ波にかゞやく朝日影さすかたにゆくあまのつり舟

寛政七年正月十八日　和歌御會始

池水長澄

千世の色をみぎりにたえぬ瀧の絲のながくもすまむ洞の池水

二月十八日　月次御會

春曙鴈

あけぼのゝ高嶺はるかに歸る鴈みおくる空もかすみそひつゝ

水郷

漕ぐ舟も柴つむ舟も世をわたるわざはへだてぬ宇治の河なみ

三月十八日　月次御會

池邊藤

むらさきは底にふかめて池のおものみぎはの松をこゆる藤波

春見戀

かいまみし色のゆかりの若草やゆく末とほるちぎりなりけむ

四月十八日　月次御會

新竹

今年生の色はわかれて見ゆるかな千世をねざしのくれ竹の蔭

鶯

河岸のやなぎの木かげよる波の色にまがひて立てるしらさぎ

五月十八日　月次御會

雨中早苗

をやみなき雨もいとはず賤の女が小笠ならべて早苗とるなり

寄螢戀

よな〳〵にもゆる螢をたぐひにもけたぬ思ひと人にしらせむ

六月十八日　月次御會

水邊涼自秋

いはまもる音だにすゞしむすぶ手は秋かとぞ思ふ庭のやり水

松風入夜琴

しらぶるや月もくもらぬ玉琴にのきの松かぜ吹きかよひつゝ

七月十八日　月次御會

野花薫衣

八千草の花のいろにもなれ衣こゝろのみかはかをりしみぬる

稀問戀

玉づさのたま〳〵とふぞ中にうき思ひすてぬを思ひしるにも

八月十八日　月次御會

鈴蟲

草垣のつゆにてりそふ月かげに鳴くねさやけき庭のすゞむし

海人

あさなゆふなかづきの蜑やなれてしる千尋の底の波の深さは

九月十八日

月照瀧

瀧の絲をながめくらしてあかなくによるもみよとや照す月影

寄月戀

おもかげを忘れぬ袖の露ぞ添ふさらでも月にものおもふ身は

十月十八日

霜

かれのこる草葉をとめておく霜は花なき野邊の花や見すらむ

筏

大井河嵐はげしく散りつもる木の葉もともにくだすいかだし

十一月十八日　月次御會

寒夜月

雪さそふよひのあらしはをさまりて月影すごくふけわたる空

戀契

かはるなよかはらじものと契るこそ長き世たのむ始なるらめ

寛政八年二月十八日　和歌御會始

江上春望

わかみどり松もかすみて住の江の岸によるなみ春ののどけさ

三月十八日　月次御會

花雪

枝を重み咲きそふまゝにまがひつゝいくかもきえぬ花の白雪

花浪

のどけしな花のしらなみうちまぜてよするもかをる岸の春風

四月十八日　月次御會

庭新樹

花に見しおもかげかへて洞の名のみどり木ぶかき庭のこの頃

野望

夏きてはかすみも霧もへだてなくさだかにむかふ野邊の遠近

五月十八日　月次御會

郭公遍

ほとゝぎすつれなかりしに今はかくきかぬ夜まれの遠近の聲

松久緑

さかゆるも神のめぐみのふか緑世々にひさしきすみよしの松

六月十八日　月次御會

夏月涼

くまもなき月をやどせるやり水は夏より外をながれてやゆく

寄蟬戀

うつせみは人にしられて音をも鳴く忍ぶる中ぞいとゞ苦しき

七月十八日　月次御會

月前荻風

影やどす月の軒端にそよぎたつおとさやかなる荻のうはかぜ

萩花映水

ゆく河のきしねの萩の咲く比はをられぬ水にひたすむらさき

八月十八日　月次御會

秋鴈

いつはあれど都の秋の月夜よし夜よしといまや鴈のきぬらむ

浦舟

松にふく風をしるべにすみよしのうらの波わけいづるとも舟

九月十八日　月次御會

紅葉

露霜のあした夕にそめそへていまぞちしほの木々のもみぢ葉

戀雨

ふる雨にぬれつゝもとふ心こそたゞ一すぢのまことなるらめ

十月十八日　月次御會

落葉敷錦

またよそにちらさで見ばや木のもとを錦に包む風のもみぢ葉

旅泊浪

聞きわびぬ旅のまくらのものうきに猶うちそふる波の響きは

十一月十八日　月次御會

遠嶺雪

つもりてし雪の光にみがゝれてをちの高嶺もさだかにぞ見る

寄松戀

たゝずむも人目をしのぶ中ぞうきたのめし暮と松のとぼそに

十二月十八日　月次御會

冬鶴

おなじ色にそれとわかねど霜はらふよそめぞさむき鶴の毛衣

冬祝

すみよしの松の白雪ちよかけてさかゆる色のいやまさるらし

寛政九年正月十八日　和歌御會始

毎年愛梅

としごとの春しる梅やあかずおもふ心にちぎる色香なるらむ

二月十八日　月次御會

名所春曙

うつしゑもおよばぬ春のあけぼのやかすみをわたす天の橋立

寄花戀

あさからぬ色香や中にこめつらむ花をかごとの露のたまづさ

三月十八日　月次御會

躑躅

梅さくらめでにし後のながめかな木蔭岩根とさけるつゝじは

蕨

玉川のなみや染むらむ春ふかきいろにも井手のやまぶきの花

四月十八日　月次御會

首夏山

春秋のさくらかへでもあさみどり夏をわかばのをちこちの山

野路

草高き野邊にゆきかふあげまきはふく笛の音やしるべなるらむ

五月十八日　月次御會

五月蟬

五月山しげき木がくれ露ふかみわきてこゝにと蟬のなくこゑ

夏夜戀

ねにたてぬ思ぞくるしよな〳〵に螢はもえてみするならひを

六月十八日　月次御會

扇

手にならす扇の風のたえぬまはてる日の暑さしばしまぎるゝ

海

うちむかふ波のみるめのすゑかけてまほも片帆もつゞく海原

七月十八日　月次御會

秋花色々

はえあれや野邊の千種の花の上はおきあまる露も色々にして

通心戀

人しれず心ばかりは通ふともいつまでおなじつらさなるらむ

後七月十八日　月次御會

竹露

このねぬるあしたの窓の竹の葉にくはゝる秋の露のしらたま

磯浪

いその松枝こすなみのいくたびぞかゝる巖もうごきなくして

八月十八日　月次御會

秋夜

名にしおふ月をめでゝは長き夜の長きもしらずむかふ空かな

秋戀

ながめわびぬ秋のならひの夕霧も思ふそなたをたちな隔てそ

九月廿八日　月次御會

白菊

よる波のいろにやまがふいく千もと菊さく秋のすみよしの濱

緑松

いやましに榮ゆる色のふかみどり立ちならびたる和歌の浦松

十月十八日　月次御會

瀧時雨

山風の落葉ふきみだす瀧のいとに音うちそへて時雨ふるなり

初見戀

初草のはつかに見てしおもかげに露のちぎりをいかで結ばむ

十二月十八日　月次御會

洛陽雪

君がめぐみひろき都の大路には雪もよに似ぬひかりなるらし

寄雪戀

たのもしな契りし夜半と淺からぬ雪ふみわくる人のなさけは

寛政十年正月十八日　和歌御會始

初春祝

しきしまのやまともろ人おもひやれこゝろゆたけき洞の初春

二月十八日

梅香薫衣

木のもとにあかずいく日をなれ衣ふかくも梅のかをり重ねて

庭上鶴馴

ところえてこゝに契らむ白鶴や庭のまさごのかぎりしられず

三月十八日　月次御會

燕來

花にほふ軒端にちかくつばくらめこぞの舊巣を忘れずやとふ

遠戀

海山をよしへだつともろともにかよふ心のみちはさはらじ

四月十八日　月次御會

月前卯花

卯の花のさかりぞあかぬ玉河やなみのよる〳〵月をやどして

月前郭公

さやかなる月の雲居に一こゑを鳴きすてゝゆく山ほとゝぎす

五月十八日　月次御會

橘風

こすのうちのそらだきものに小夜風の吹きそへて匂ふ軒の橘

草庵

さらでだにしづけきものをひとりすむ草の庵の雨のつれ〴〵

六月十八日　月次御會

夕顔

しづがたくかやりのけぶり心せよくれまちてさく花の夕がほ

人傳戀

みちのくのしのぶもぢずり露だにも人傳ならでいかでもらさむ

七月十八日　月次御會

砌下荻

ふくとしもみぎりにしれぬ秋風を荻のうは葉や音にたつらむ

遠村鶏

鳥の聲かずそふまゝにあけ近みほの見えそむる遠のひとむら

八月十八日　月次御會

月前初鴈

月かげにつらもつばさもさだかにて遲れさきだちわたる初鴈

松風增戀

見し夢もさめてつれなきひとりねの思ひそへたる夜半の松風

九月十八日　月次御會

吹上濱 秋

さく菊の花の香さそひ波よせてげにふきあげの濱のあきかぜ

松島 雜

くれてまたさぞなと月を松島や小島がとまやあかぬながめに

十月十八日　月次御會

寒樹交松

たちならぶ梢は冬のいろながらなかにときはの松ぞまがはぬ

深夜戀

袖しをるおもひの露もふかき夜にまどろまぬより夢も結ばで

十一月十八日　月次御會

雪朝

ふりつみし雪はさながら朝日影にほへる山のながめくもらぬ

旅夕

心あてにやどりさだめむ里までもはるけき旅の夕ぐれぞうき

十二月十八日　月次御會

庭早梅

咲きそめて春おもはるゝ梅の花ふりまがふ雪の垣根ながらに

初契戀

初草のまだうらわかきちぎりこそゆく末ながき年もつむらめ

寛政十一年正月十八日　和歌御會始

霞遠山衣

春やとき花さくころは遠山にかすみのころもまづにほふらむ

二月十八日

浦春曙

たぐひなやたづも聲してのどかなる浦わの波の春のあけぼの

不逢戀

あふことはかた山きゞす音にぞ鳴くつらき霞に隔てられつゝ

三月十八日　月次御會

朝雲雀

朝日さす野邊のどかにもたつ雲雀かすめる空に聲たかくして

巖頭苔

松も生ふる巖がうへのこけごろも千世をかさねて緑なるらし

五月十八日

菖蒲

あやめ草長きねざしを祝ふより軒のつまにとなべてふくらし

螢

池水のみぎは中島てらしつゝ飛びかふほたるかげのすゞしさ

六月十八日　月次御會

瀧邊蟬

枝おほふ木々のこずゑの蟬のこゑなほおちそへてひゞく瀧波

寄扇戀

いかばかり心やふかくこめつらむとりかはしつるなかの扇は

七月十八日

露淺

日にそひてしげさまさらむこのごろは朝夕に見る草の上の露

舟路

さやかなる月をのせたる舟路こそこぎゆく末の跡も見ゆらめ

八月十八日　月次御會

連夜翫月

なかめても猶あかなくの影なれや名におふ月のよな〳〵の空

稀問戀

まれにだにとはずばものをとばかりに思ひなだむる中の年月

九月十八日　月次御會

初見紅葉

いつのまにかくそめけりと見そむるや松の葉ごしの秋のもみぢ葉

田家秋興

色づきし稲葉は風にうちなびきうす霧まよふ小田のかりいほ

十月十八日　月次御會

聞時雨

あかつきのねざめの枕ゆめならで一むら時雨きくもさびしき

見戀

いかにして舟さしよせむ朝な夕なみまく堀江に袖はぬれつゝ

十一月十八日　月次御會

浦千鳥

浦風のさえふくる夜のむら千鳥おなじこゝろに友さそふこゑ

巖松

生ひそめていく千世しるきみどりかな苔の巖にたてる松が枝

十二月十八日　月次御會

爐火忘冬

春やかよふ心も花にうつるまで寒さよそなるうづみ火のもと

忍久戀

袖の露しのぶもぢずりみだれじと思ふをなかに年もへにけり

寛政十二年正月十八日　和歌御會始

松千春友

つきせじな千世十かへりの花も見む松を友なる洞のうちの春

二月十八日　月次御會

花下見月

夕ばえのなごりの木のまもる月に一きはめづる花のしたかげ

寄車戀

うしや人まちうかれにしわが門にこゝろもよせずすぐる小車

三月十八日　月次御會

野遊

すみれつみつばなぬきつゝ春の日の長きもしらぬ野邊の諸人

行旅

見ず知らぬ野山わけつゝゆく旅も春はこゝろを花になぐさむ

五月十八日　月次御會

朝早苗

ことぶきの山田の早苗うゑたてゝこの朝風になびくすゞしさ

夕思出戀

面かげのたちそふのみとながめわびぬ夕の空の雲のはたてに

六月十八日　月次御會

夏夜月庭

すゞしさはまたとたぐひもなつの月みぎりをみがく霜の光に

河玉藻

河水に枝たるきしのやなぎにもおなじ玉藻のいろのすゞしさ

七月十八日　月次御會

浦秋夕

波の上のさびしく暮るゝ夕霧にほのめきそむる蜑のいさり火

寄萩戀

萩の花かごとになしてとひよるも露のみだれを人やとがめむ

八月十八日　月次御會

月前竹露

雨はるゝ軒端の竹のつゆのたまみがきぞ見する月のさやけさ

月前松風

しづけしな月はふけゆく影のうちにこゝろもすめる庭の松風

九月十八日　月次御會

霧中鶉

霧こめて荻もすゝきもわかぬ野にふしわびつゝや鶉なくらむ

水邊暮

ゆく水の音もさびしきゆふべかな月はおそしとむかふ河瀬に

十月十八日　月次御會

十月見紅葉

秋になど染め遲れけむ冬きての霜にをりはへめづるもみぢ葉

寄名所浦戀

おもかげをさこそ都に戀ひぬらめ須磨の浦波たちわかれては

十一月十八日　月次御會

鴨

夜をさむみうきねの床やこほるらむ聲たえずきく池のあし鴨

窓

寢覺して聞きつる鐘の聲のうちに雪よりしらむ窓のあけぼの

十二月十八日　月次御會

年内似春

くれちかく殘る日數の年のうちに春おもはれて梅ぞほゝゑむ

寄絲戀

むすぼれし心もとけてうきふしはよにしら絲の末もたえじな

享和元年正月十八日　和歌御會始

春山成興

春の色にかすめる山のながめこそ心をそむるはじめなるらめ

二月十八日　月次御會

絲櫻

春風になびくぞあかぬ絲ざくらいと長閑にもくりかへしつゝ

馴戀

中垣は人目ばかりのよそひにてこゝろ隔てずなるゝあけくれ

三月十八日　月次御會

春朝

あけぼのゝ眺めあかずも待ち出づる朝日のどけき春の山の端

春夕

そことなく花は散りきて夕霞のどかに暮るゝいりあひのかね

四月十八日　月次御會

葵

殿のうちのすだれにかゝる葵草みどりすゞしくなびく朝かぜ

笛

をさまれる代々の雲居のふしにあふためしもたえぬ笛竹の聲

五月十八日　月次御會

曙郭公

ほとゝぎす心ありてやあけぼのゝ雲のそなたにもらす一こゑ

寄橋戀

契りてし中に月日はたちばなのかをるゆふべぞものを思はず

六月十八日　月次御會

海邊夏月

いそ山の松のむらだちあらはにてみるめに夏は波のうへの月

雨中綠竹

風の音とまがひし雨にうちぬれてみどりかさなる窓のくれ竹

七月十八日　月次御會

殘暑

秋といへどおなじ暑さにたへかねて誰も立居に風ぞまたるゝ

寄衣戀

わが中はいくそのとしか戀衣うらなくたのむちぎりかさねて

八月十八日　月次御會

鴈

たぐひやは有明の月もかげすめる嶺こす鴈のさやかなるこゑ

蘋

種なくていかに生ひけむ池水のところせきまでしげるうき草

九月十八日　月次御會

紅葉映池水

うすくこき色をうつして池水のなみにあやなす岸のもみぢ葉

稀會不絶戀

あま衣まどほなりともゆく末のたえぬあふよを中にたのまむ

十月十八日　月次御會

殘菊帶霜

朝霜に色そめかへてなほのこる菊こそながきさかり見すらめ

蘆間鶴

蘆の葉はまばらになりてゐるたづの翅の波にたちもへだてぬ

十一月十八日　月次御會

山雪

春秋の花ももみぢもわすれつゝ雪に見わたすあさとでのやま

戀河

契りてしはじめよいかにおもひ河淵となるまで年はへにけり

十二月十八日　月次御會

松邊千鳥

いくたびか聲うちそへてたつ千鳥いその松かぜ波のひゞきに

寄雪祝言

神わざのことをあまたの君が代のゆたけさしれと雪や積らむ

享和二年正月十八日　和歌御會始

萬物感陽和

大空のかすみたつより草木にもおよぶや春のめぐみなるらむ

二月十八日　月次御會

霞中歸鴈

歸る鴈かすむそなたに聲はしてつばさわかれぬあけぼのゝ山

春忍戀

詠めわびぬしのぶの軒のつれ〴〵とふる春雨の音にたてねど

三月十八日　月次御會

月映花

くるゝ夜はかすめる月のかげそへてにほひみちたる花の白妙

山中瀧

山ふかみひゞきも高くおちたぎつその水上はいづくなるらむ

四月十八日　月次御會

餘花

めづらしな山路はふかく夏あさきみどりにまじる花の一もと

遇戀

待つうらみ別のうさも知らぬ身の新手枕はゆめかとぞおもふ

五月十八日　月次御會

樗

たちよれといふばかりにもこむらさきたが宿ならし樗さく蔭

湖

志賀の浦やうかぶ小舟もかずみえて一木の松によするさゞ波

六月十八日　月次御會

夏夜涼

たへかねし晝のあつさも忘れけり端居のそでにかよふ小夜風

寄扇戀

扇こそ中にたのまめしのびわびねられぬ閨のなぐさめにして

七月十八日　月次御會

翫秋花

露と共にたえずこゝろをおきて見る秋のまがきの花の千種は

海人

波かけて鹽木をはこぶあま人はからきわざにも年やつむらむ

八月十八日　月次御會

松蟲

荻すゝきなびくまがきの露みがく月まつむしのくれいそぐ聲

戀朝

今朝はまたありしにまさる思河ゆめの荒瀨ぞなか〳〵にうき

九月十八日　月次御會

水岸菊

水底に見えてながれぬ色なれや河ぎしちかく咲けるしらぎく

林鳥

霧はれし林のこずゑさま〴〵にいろどるばかりあそぶむら鳥

十月十八日　月次御會

しぐれ

はれくもり空さだめなく山々をしぐれてめぐる風のうきぐも

うらみ

かたはしをなか〳〵いはじ月日へて心の奥につもるうらみは

十一月十八日　月次御會

冬朝山

山たかく雪をすがたの峰よりぞ出づる朝日のかげくもりなき

冬夕海

夕潮のさしくるならし海とほく鳴きわたるたづの聲も寒けき

十二月十八日　月次御會

炭竈

雪の日もなほ立てそふるすみがまの煙ふきしく風のさむけさ

田里竹

しづかすむ里のへだての竹ならし小田のそなたに千尋ある陰

享和三年正月十八日　和歌御會始

多春採若菜

いくたびか年の若菜をつみそへてなほ末とほき春もかさねむ

後正月十八日　月次御會

月前梅花

かをらずば雪とや見ましししろたへの月さす軒の梅のひともと

車中戀人

ほの見えしその面かげに小車のゆくへいかにと慕ふわりなさ

二月十八日　月次御會

春曙花

いひしらぬ色に匂ひて咲きつゞく花よりしらむあけぼのゝ空

河筏

河風のふくものどけきゆふまぐれ霞をのせてくだすいかだし

三月十八日　月次御會

春田蛙

水底のかはづのこゑもにほふなり花の香うかぶはるの山田は

春増戀

思ふともいはねの松の下つゝじなどあやにくに色まさるらむ

四月十八日　月次御會

初郭公

山かづらあかつきかけて時鳥まちしかひある今朝のひとこゑ

臨池

心をばたぐへてぞ見るそこきよくすむもにごるもひとつ池水

五月十八日　月次御會

夏草色々

しげりあふみどりはひとつ夏の草秋に千種のいろをこそ見め

恨鳥別戀

あふ夜にはつらき別のそふものを鳥の聲のみなにうらみまし

六月十八日　月次御會

松蟬

しげりつゝあつき日おほふ松のかげ梢に蟬のこゑぞしぐるゝ

浦涙

春秋に浦のながめのかはるかな波のたちゐはへだてなけれど

七月十八日　月次御會

名所萩

春日野や萩さく秋をまちえてはこゝにと鹿のなれもたつらむ

名所戀

いつまでぞひとり心をつくば山はやましげ山さはりある世は

八月十八日　月次御會

秋園月

たぐひなやくまなき月にみがゝれてつゆひかりそふ秋の花園

晴天鶴

ゆたけしなみどりの空にたちまふもげに千とせつむ友鶴の聲

九月十八日　月次御會

鶉

をりしもあれ霧たつ野邊の夕まぐれさびしさそへて鶉なく聲

恨

おもふわが心のとがとしりてしも人のつらさは猶ぞうらめし

十月十八日　月次御會

落葉埋菊

冬さむみあらしの木の葉ませのうちの菊の錦とちり積りぬる

海上雲遠

雲なれや何くまもなきうなばらの波にわかれてこゆる一むら

十一月十八日　月次御會

雪似花

朝戸あけてむかふみぎりの梅さくら花のおもかげ見する白雪

寄雪思

うちとけぬ中の思ひよ人はいかに雪も日數もつもりゆけども

十二月十八日　月次御會

鷹狩

かりくらす野風をさむみ鷹人のたもとの雪をうちはらひつゝ

籬竹

すぐなるを心の友とならひみるまがきの竹のさかえゆくかげ

文化元年正月十八日　和歌御會始

竹契萬齢

色をそふ竹のよろづ代いくかへりかさねむ洞の春ぞさびしき

二月十八日　月次御會

紅梅盛

日のめぐる軒にさかりの梅の花かすみを枝のいろに見せつゝ

春田家

のどけしな雲雀の聲もうちかすみむかふ田づらの賤が家居は

三月十八日　月次御會

さくら

馬くるまたてならべたる櫻がり花にこゝろをうつすこのごろ

ちぎり

手につみてねよげに見えしこむらさき深き契の始めなりけむ

四月十八日　月次御會

對月待郭公

いでそむる月ぞさやけき忍び音も今こそもらせ山ほとゝぎす

旅舟聞涙

夢もみつしづこゝろなきとまり舟波のひゞきのたえず聞えて

五月十八日　月次御會

五月雨

瀧の絲ははたばりひろく池水にみだれてあまるさみだれの比

寄螢戀

ながめわびぬそなたの空にゆく螢ほのめかすべき思ある身は

六月十八日　月次御會

夏月

しづかやもかやりの煙たきさして涼しき月のかげや見るらむ

河風

やなぎかげあつさながれてゆく河は夏をよそなる水の夕かぜ

七月十八日　月次御會

露

秋かぜもこゝろして吹け荻すゝきつゆの玉ぬくすゑ葉〳〵に

蝶

花園のはるのこてふも秋きては野邊の千種ややどりなるらむ

八月十八日　月次御會

池上月

うき草は風のまに〳〵吹きよせて月のかゞみとすめる池みづ

初祈戀

ゆくすゑもまことたがはじ今日よりは契を神に祈りそめつゝ

九月十八日　月次御會

立田川紅葉

散らぬかげも底にふかめてもみぢ葉の名にも立田の秋の河水

佐夜中山旅

都のみおもひつゞけてねもやらずあかしかねたる佐夜の中山

十月十八日　月次御會

時雨

見るがうちにこゝ離れゆく浮雲のかゝる高嶺や今しぐるらむ

待人

ちぎらずばたゞきかましをかならずの夕つれなき松風のこゑ

十一月十八日　月次御會

山野雪朝

いづる日のたかねは雪にみがゝれて野邊白妙にむかふ寒けさ

冬夜長

幾度か夢さめて思ふさむき夜をいをねかぬらむ賤がふしどを

文化二年正月十八日　和歌御會始

池水似鏡

かげうつす松のみどりもますかゞみ池のこゝろの長閑なる春

二月十八日　月次御會

都春曙

山といふ山をみやこのあけぼのは霞もわきてのどかにぞたつ

名所浦

名をみがくいづくはあれど須磨明石よゝの言葉にかゝる浦波

三月十八日　月次御會

夕雲雀

かすみわけゆくへ長閑にたつ雲雀やがて芝生の床に鳴くなり

春戀

歸る鴈そなたの空にゆく〳〵と見送るまゝにうらやまれぬる

五月十八日　月次御會

竹間夏月

うゑてみる竹の若葉のひま〳〵に露みがく月のかげぞ凉しき

旅泊松風

ふきとふく磯の松かぜこゝろせよさらでも夢は波のまくらに

七月十八日　月次御會

荻

秋きぬといふよりやかてさびしきは軒端のをぎの夕かぜの聲

荻

わけゆけば色なる露やこぼるらむ萩さきつゞく野邊の細みち

八月十八日　月次御會

浦擣衣

波の月うちいでゝ見ればあま人のきぬたの音も空にすみぬる

稀通戀

稀なるもしひてかたらじ忍びつゝとはれとはるゝなかの通路

後八月十八日　月次御會

秋山朝

日をへては紅葉のにしきたちそはむ薄霧にほふ今朝の山の端

秋海夕

雲の波わけこし鴈もこゑそへてうらわさびしき秋のゆふぐれ

九月十八日　月次御會

柞紅葉

そめつくす中にわかれてたゞ一木はゝその紅葉色はめづらし

蔦紅葉

つたかづら日數あまたの秋をへて岩根こずゑにかゝる色こさ

十月十八日　月次御會

氷初結

もみぢ葉のよどむにぞしるうす氷みそめてさむき庭のやり水

別戀

たまのをの長くはまたもとばかりにうしや別るゝ今朝の小車

十一月十八日　月次御會

冬松

よつの時葉かへぬ松も冬にいま雪まつほどのかげはさむけき

冬鶴

江の蘆は霜がれそひてあらはにもたてるとぞ見るなみの白鶴

文化三年正月十八日　和歌御會始

龜萬年友

ほらの池にすみなるゝ龜のよはひこそ今ゆくすゑも萬代の友

二月十八日　月次御會

曙鶯

あけぼのゝ光とともにさへづるも匂ひえならぬ梅のうぐひす

園竹

すぐなるを心の友とうゑそへてあけくれあかぬ園のくれたけ

三月十八日　月次御會

岡躑躅

夕づく日さすやをかべの松かげにてらすつゝじの花の色こさ

岸欵冬

咲きみちし岸うつ波の千々の玉もこがねの色のやまぶきの花

四月十八日　月次御會

遲櫻

わか葉そふ緑のなかのおそざくらまがはぬ花のにほふ一もと

戀夕

かこちなるゝ曉よりもかくばかり夕のうさをたがはじめけむ

五月十八日　月次御會

水鷄

月見るはいづくも同じ眞木の戸をたゝく水鷄のをちこちの聲

朝雲

いでそめし日の影そひて一すぢはみねにかゞやく今朝の白雲

六月十八日　月次御會

池邊納涼

たちよりてむかへば涼し池水のみくさをよそによする夕かげ

寄瞿麥戀

いつをわが待つことならし獨のみおもひの露のとこなつの花

七月十八日　月次御會

秋はぎ

秋萩の花のにしきをたてぬきに露のかず〳〵ひかり添へぬる

松むし

聞きよればまた異方に音をたつる人まつ蟲の名にはあれども

八月十八日　月次御會

初聞鴈

めづらしな霧たつ空のあけがたにくる初鴈のほのかなるこゑ

松臨池

年ふるやみぎはの松のふかみどり池のかゞみに影をうつして

九月十八日　月次御會

瀧紅葉

はえあれやみなぎり落つる瀧つせに枝さし浸す秋のもみぢ葉

寄鶉戀

床あれし野邊のうづらのうき思とはれぬ中のたぐひとぞしる

十二月十八日　月次御會

早梅

年のうちにはや咲く枝にふりかゝる雪もかをれる梅のはつ花

水鳥

霜こほりさえふくる夜はきくたびにうきねしらるゝ水鳥の聲

文化四年正月十八日　和歌御會始

霞添春光

あまつ空春のみどりにかすむこそよもにのどけき光なるらめ

二月十八日　月次御會

春山月

花ならぬひかりぞにほふ春の月かすめる山をいでがてのそら

春浦松

さかえゆくうらわの松の千世の波いくたび春に色まさりつゝ

三月十八日　月次御會

野遊絲

空にみち草によるてふいとゆふに心ひかるゝ野邊の日ぐらし

片戀

たゞ獨つれなくつもる月日かなあひ思ふ中もあればある世に

四月十八日　月次御會

夏竹

今年生のかげすゞしくも見ゆるかな螢もてらせ窓のむらたけ

夏鷺

夏河やいをのよる瀨のやなぎかげたちもはなれず見ゆる白鷺

五月十八日　月次御會

船中郭公

舟とめて聞かばや今夜ほとゝぎす一聲ならぬこゑのかぎりを

寄月待人

まつ人はとはで更けゆく夜半の月限なき影のなか〳〵に憂き

六月十八日　月次御會

夕顔

しづがやの暮とひみればしろたへにかきねをかこふ夕顔の花

蜘蛛

よるの雨のなごりの露を玉とみせて軒端にかくるくもの絲筋

八月十八日　月次御會

居待月

ながめつゝ物にまぎれずつくづくとひとり居待の月の山の端

旅朝

今日もまた知らぬ野山をわけみむと心ぞいさむ旅のあさとで

九月十八日　月次御會

菊

長月の名にしあひたるしら菊の花のさかりは千世もつきめや

蔦

かげたかき松をいろどる蔦かづらかゝるに秋の色や見すらむ

十月十八日　月次御會

水上落葉

からにしきあらふとや見む池ひろくさわがぬ水に浮ぶ落葉は

寄時雨戀

ながめわびそなたの空と思ひやる袖に幾たびうちしぐれつゝ

十一月十八日　月次御會

冬のつき

霜雪のそれかとばかりしろたへにかげしく庭のふゆの夜の月

やまざと

花もみぢをりすぐしてはおとづるゝ人めまれなる冬の山ざと

十二月十八日　月次御會

松雪

朝戸出に見てぞおどろく音たてしあらしの松をうづむしら雪

竹雪

しら雪のつもるまゝにもなびきふす姿はさむきまどのくれ竹

文化五年正月十八日　和歌御會始

梅花告春

こと木よりまづ咲く梅の色香こそむべ春をしる始めなるらめ

二月十八日　月次御會

歸鴈

春さむみかすまぬ空をかへる鴈ゆきふるさとに何いそぐらむ

後朝戀

あはぬまのうきはものかは別れゆく今朝はたまさる中の思に

五月十八日　月次御會

河邊螢

すゞしくも河ぞひ柳かげくるゝ岸ねてらしてほたる飛びかふ

寄垣戀

いひかはす折しらずとも中垣の隔てしなくばうきもまぎれむ

六月十八日　月次御會

蚊火

なすわざの暑さはさぞな幾度かたゆめばくゆるしづが蚊遣火

流水

むすばでも向へば涼しはやき瀬に流るゝ水のちりもよどまで

七月十八日　月次御會

鹿鳴秋萩

さく萩の色にみだれて鳴く鹿は秋のおもひのかぎりなるらし

海邊旅

いそぎはの松が根まくらかりぶしはしづこゝろなき波風の聲

八月十八日　月次御會

霧中鴈

霧こめしゆふべの空にわたるとは誰にかしのぶ鴈のたまづさ

月夜戀

こひわぶる面かげたちて思ひそふひとりが爲の月ならねども

九月十八日　月次御會

葛風

白露のおくひまぞなきいくたびか吹くをうらみの風の眞葛葉

水鄕

くれそへば水のうき霧やゝ晴れて月すみわたる宇治の河づら

十月十八日　月次御會

尋殘紅葉

猶深くしひてわけみむもみぢ葉やちりて幾日もあらぬ山路に

不逢戀

待ちうらむならひも知らず同じ世にすむばかりなる中の契は

十二月十八日　月次御會

冬梅

冬がれのこと木にまじる梅の花はるまつ色香めでゝこそみめ

冬戀

ものおもふ涙のこほりむすぼゝれねもせであかすさよの手枕

文化六年正月十八日　和歌御會始

寄松祝言

春といへばさらに緑のいろそへて老木の松ものどけさぞしる

二月十八日　月次御會

庭上櫻

朝霜を朝日のみがく庭ざくら見しゆふばえのいろはものかは

野邊雉

ねよげにも見ゆる若草もゆる野の霞むそなたにきゞす鳴く聲

四月十八日　月次御會

緑樹

うすくこくひとつ緑にしげりつゝ月さへもらぬ庭の木ぶかさ

釣舟

朝なぎの波に漕ぎ出でゝ夕日かげさしつれよする蜑のつり舟

五月十八日　月次御會

朝早苗

うゑたてし昨日の早苗つゆ見えてこの朝風になびくすゞしさ

戀枕

一夜だにかはさぬ閨の枕にはなぐさみぬべきうつりがもなし

六月十八日　月次御會

蟬聲

吹きおちて涼しくもあるか山松のかぜにきほへる蟬のもろ聲

江蘆

しらつゆの玉江の蘆の葉をしげみすゞしく見えてかよふ夕風

七月十八日　月次御會

白露如玉

あかなくに風なちらしそ秋のひかりみがくみぎりの露の白玉

寄薄戀

ほにいでゝ招くもあやな花すゝき人よいかにと思ふゆふべに

八月十八日　月次御會

山端月

雲霧ははらひつくせし秋かぜのみがきて出づるやまのはの月

海邊月

のこりなくてらしてすめる波の月いそべの松も蜑のとまやも

九月十八日　月次御會

里擣衣

秋風のさそふを聞けばいく里かきぬたの音のうちもたゆまぬ

羇中友

海山のなぐさみながらふるさとを思ふはおなじ旅のともどち

十月十八日　月次御會

翫殘菊

霜をへてかはらぬ色香ことさらにもてはやし見るませの白菊

名所戀

つれなさに猶こりずまの浦のあましほなれごろもほさぬ年月

十一月十八日　月次御會

千鳥

かげさゆる月もさし出の磯千鳥松の根さらぬこゑのきこゆる

籬竹

風になびき霜と雪とのやどりとやまがきに高きくれ竹のかげ

文化七年正月十八日　和歌御會始

心靜酌春酒

かぞへそふ老をわすれてゆたかにも若がへる春の霞をぞくむ

二月十八日　月次御會

浦邊春月

たぐひなみ霞にくれておぼろなる月やしるべの春のうきふね

寄春雨戀

つれ〴〵とふる春雨の夕まぐれしのぶの露のみだれてぞ思ふ

四月十八日　月次御會

卯花

時しらでかきねばかりの雪と見む卯の花さける庭のこのごろ

郭公

ほとゝぎすほのかにもらす一聲はいとゞなごりも有明のそら

五月十八日　月次御會

五月雨雲

朝夕に見なれぬみねを見するかな雲たちのぼる五月雨のころ

寄菖蒲戀

あやめぐさ一夜かりねの枕よりながきちぎりや結びそむらむ

六月十八日　月次御會

納涼月

風まつとたちいでゝとふ杜のかげもりくる月ぞいとゞ涼しき

納涼水

いはまよりたえずながるゝ音すみて夏の外なる庭のやりみづ

七月十八日　月次御會

花薄

花すゝきたれとさだめずうちまねき露ぞみだるゝ野邊の秋風

市人

うりかふはおなじこゝろのわざならし朝夕たえずさわぐ市人

九月十八日　月次御會

暮秋鹿

くれてゆく秋をしたひて鳴く鹿やなほ妻ごひの聲をそふらむ

雲遠望

海ごしの山の端とほく波はれてひとむらそれとかゝるしら雲

十月十八日　月次御會

瀧邊時雨

瀧の絲にうちはへかゝるむらしぐれ同じ岩根の紅葉さそひて

後朝戀

いかにして又逢ふまでと永らへむ今朝の思にきえかへる身は

十一月十八日　月次御會

寒月照松

こがらしはさそはぬ松の蔭ながら照りそふ月ぞ霜にさえぬる

橋行客

柴人のあやふげもなくゆきかよふなるればなるゝ谷のかけ橋

十二月十八日　月次御會

名所千鳥

つきせじな和歌の浦わの友千鳥さかえを松のねにたてゝ鳴く

名所雪

をしほ山小松がうへにふる雪は千世の花とやつもりそふらむ

文化八年正月十八日　和歌御會始

野澤始迎春

春やしるよはひを野邊の初若菜へだてぬ澤のみづもぬるみて

二月十八日　月次御會

霞中春雨

わきて今朝ふかき霞と見るがうちにやゝふりいづる庭の春雨

夕忍戀

契りしはこの夕暮としのびかね松のとぼそにたちうかれぬる

後二月十八日　月次御會

花間月

いひしらぬいろよにほひよたぐひなき花の木のまの月の光は

花見雪

さきつゞく幾木の花のしろたへは枝をおもげの雪のおもかげ

三月十八日　月次御會

翫桃花

いはふぞよ三千世の桃の花もしれ初もとゆひの春まちえつゝ

水邊松

よそぢあまりなれ見る洞の池の松水のかゞみに影をうつして

四月十八日　月次御會

竹亭夏來

くはゝりし春はきのふにくれ竹の窓のあさかぜ夏は來にけり

寄葵戀

年もへぬながき契のもろかづらあふひてふ名を中にたのみて

六月十八日　月次御會

夏草露

ゆきかよふ道だにあらば夏草のしげみの露をはらはでもみむ

寄木戀

朽ちせぬを中にたのまむ年へてもいつかあふせはなみの埋木

八月十八日　月次御會

秋花

露のたまむすぶ絲萩をみなへしなまめく野邊ぞ秋のいろなる

秋鳥

めづらしな霧のゆふべのはださむみ秋かぜさそふ初鴈のこゑ

九月十八日　月次御會

野分風

やちくさの花のまがきは心せよ野分のかぜのさわぐゆふぐれ

別戀

いかにして忍ばむ物かあふにそふ別のうさはかねて知れども

文化九年正月十八日　和歌御會始

竹契遐年

ならひつゝ千世もちぎらむくれ竹のなほきすがたを人の心に

二月十八日　月次御會

花洛春月

たぐひなやみやこのにしきたちならぶ柳さくらにかすむ月影

行路見戀

ゆきずりのそでの追風えにしにて見しに心のさわぐわりなさ

四月十八日　月次御會

新樹朝露

若葉そふこずゑの朝日かゞやきて露のひかりもあかず涼しき

夕待郭公

待たれてと猶しのぶらし夕月のかげにもらせよ山ほとゝぎす

五月十八日　月次御會

水鶏

月見つゝいづくもさらぬまきの戸をたえず水鶏の何叩くらむ

忍待戀

よひのまの人しづめてと待ちふけてわが門すぐる小車のおと

六月十八日　月次御會

夕顔

暮かけてひかりさだかにすゞしきは垣根のつゆに咲ける夕顔

河舟

すゞしくも淀の河瀬の月まちてかず〳〵なみに出づるとも舟

七月十八日　月次御會

荻風

いつしかとはつ秋かぜの吹きそめて軒端の荻の音に告ぐらし

萩露

わけて今ゆく〳〵袖にうつろふやつゆも色ある野邊の萩はら

八月十八日　月次御會

海邊霧

いその松それかあらぬか霧こめて波のみるめもわかぬ海づら

旅戀

旅ぞうき戀ぞくるしき草まくらむすぶちぎりも夢もうとくて

九月十八日　月次御會

月前白菊

てる月のひかりに花の色そへてさかり見せたるませのしら菊

雨中紅葉

この夕ひときは染むるもみぢ葉や音せぬ雨のえだに知られて

十一月十八日　月次御會

霰落柏

玉がしはたまさかならず音たてゝあられくだくる風の寒けさ

戀車

まつにかこちかへさは恨み小車のうしやつきせぬ戀ぞ苦しき

十二月十八日　月次御會

山雪

うつしとる繪にもおよばじしろたへの雪の光にみがく山の端

野雪

めなれつる松の梢もわかぬまで雪ふりつもる野邊のさむけさ

文化十年正月十八日　和歌御會始

梅有色香

春きぬと咲くやこの花色も香もこと木にめぐむ始めなるらむ

〔以上公宴御會和歌〕

天明六年二月十三日將軍家治五十壽齡賀

寄鶴祝言

五十路よりかぞへそへつゝなれてすむ鶴の齡に契れとぞ思ふ

〔以上見聞隨筆〕

仁孝天皇

霞知春

鶯もまだ告げそめぬあさぼらけまづ春みせて立つかすみかな

江上春望

またたぐひ涙ものどかにかすみつゝ梅が香にほふ難波江の春

江春曙

堀江こぐ棚なし小舟たちかすみゆくへいざよふ春のあけぼの

子日鶯

松とともに千年の春を契るらし子の日する野のうぐひすの聲

霞

雪のこるみ山のおくもかすみけり春のいたらぬ方はあらじな

燕

花の香を吹き入るゝ風にさそはれて小簾のとちかく燕なく聲

蛙

流れゆく春の日かずを川水にせきとめて鳴くかはづなるらし

藤

池ぎしの岩根ににほふ藤なみやいくよの春をかけて咲くらむ

郭公

時鳥はや鳴かなむと待ちわびてぬるまをさへもをしむこの頃

夏月

うたゝねの枕すゞしくさす影にうちおどろけば明くる夜の月

夏朝

てらしつる夜半の螢はかげ消えてしばしすゞしき露の草むら

泉

まだきより秋もやこもる谷かげの岩もる清水なつをへだてゝ

女郎花

女郎花あだなる花と見ながらも色めく野邊はすぎがてにする

尾花

秋來ぬとはやほに出でゝまねくなり尾花が袖の露のゆふかぜ

月前紅葉

よるもなほ月の光のてらすより色をみぎりの木々のもみぢ葉

瀧邊紅葉

幾千筋よりまぜておとす瀧の絲を錦につゝむもみぢ葉のかげ

紅葉交松

枝かはす岸のもみぢのいくしほに松のときはも秋をわくらし

雪

ふりつもる外山はるかに見わたすも都へだてぬ今朝のしら雪

夜衾

埋火のきゆともよしやかさねつゝ冬を忘るゝ小夜のをぶすま

秋戀

わりなしや人のこゝろも秋の風ふきとめておくそでのしら露

寄草戀

人は知れ我はしのぶの草の名にこひつゝ年をふるぞつれなき

寄鳥戀

待つ人はこの夜ふけゆく槇の戸をうしや水鶏の何たゝくらむ

松風入簾

かきならすもやの小琴の音をそへてえならずかよふ軒の松風

竹露

秋風のはらふあとよりおきあまるうてなの竹の露のさやけさ

舟

見るがうちにゆくへも遠くなるみがた浪路をわたる沖の友舟

〔以上當今御製〕

松有春色

雪のうちも松の常磐はあらはれし今ひとしほの春のいろかな

子日鶯

子の日してひくや小松のねもゆらにさそはれきなく野邊の鶯

霞滿山

さほひめの春の衣のをりはへてかすみかゝらぬ山はあらじな

梅香

よろづ木の花てふ花の花の香も梅のにほひになにおよぶべき

社頭梅花

神垣はやはらぐ春のかげそひて散るべくもあらぬ梅の花かな

山花

消えがての雪より雪におもかげをあくがれし花のにほふ山眉

佐保姫の春のこゝろもくみしるは霞にあかぬ野邊の日ぐらし

夕郭公

ほとゝぎす村雨すぎしゆふぐれの月とともにも雲間もるこゑ

梅雨

雲の波たつも八重ぶき蘆の屋のこやいつまでにさみだるゝ空

夏月涼

たとへとる扇もしらぬ風をさへそでにおぼゆる月のすゞしさ

水上螢

さそふ水ありとや風のうき草にすがるほたるのかげも流れぬ

夏天

いくへともあやしき峰をたゝむ雲にてる日かゞやく六月の空

星河秋興

五百機のにしきよそほふ天の河きりのとばりも雲の羽そでも

擣衣

衣うつきぬたの音のうらむるををちかた人に知らせてしがな

蟲恨

草垣のつゆさむくなるうらがれによひ〳〵蟲の聲うらむらむ

秋園月

よるひかる玉かと見えてしらつゆに月もかげしく秋の花ぞの

月前紅葉

そらにてる月のかつらの下紅葉かげより露もおちてそむらし

落葉滿

あらし吹く神のみ山のもみぢ葉によどむ立田のせとの河なみ

網代

網代木によりくる氷魚や篝火のよを宇治川と知らずやあるらむ

篠上霰

冬さればあられみだれてさゝの葉のみ山もさやに嵐ふくなり

夜衾

あつぶすま重ねわぶ夜に賤が屋を思へば〳〵さこそさゆらめ

忍久戀

逢ふことはいつまでとてかしのぶ山しのぶ心に年をかさねて

後朝待書

言の葉の猶殘りしとかきこさばいかにかあらむあとの朝とて

戀恨

いまはたゞ恨ばかりとなりはてゝうさもつらさも昔がたりに

松下風聲

ほらしめてすむ山人や山まつの千とせの風のこゑはしるしも

〔以上仙洞御製〕

孝明天皇

嘉永元年二月十八日御會始

鶯有慶音

うぐひすの聲の色にもあらはれてもゝよろこびの幾千代の春

同年二月廿二日水無瀬宮御法樂

山霞

花鳥ののどけき春のいろ見せてかすみぞなびく四方の山の端

同月廿五日聖廟御法樂

朝鶯

梅やなぎいろめく春の庭の面に朝日まちえてうぐひすの鳴く

同年三月廿四日月次御會

初春風

ふるとしの雪げの空にたちかへてやはらぐこゑの春のはつ風

卯花

月雪のひかりを見せて玉川のきしねつゞきに咲けるうのはな

同年四月二日當座御會

子日

いく春も今日の子の日に契りおきて千代を祝はむ松の言の葉

同年七月七日御會

織女契久

言の葉のちぎりは千世の秋かけてためしひさしき星合のそら

同年九月八日重陽御會

菊契多秋

松竹のよはひを契るためしあらば菊もいくよの秋やかさねむ

同二年正月廿四日御會始

禁中祝

九重のうてなの竹のみどりにも千代の春たついろぞ見えける

同年三月十一日當座御會

若菜

雪こほりとけし澤邊のわか菜こそおのが春ぞと人につまれめ

同年四月二日當座御會

白梅

雪は消えさくらは早き木末よりおもかげ見せて咲ける梅かも

同三年正月廿四日御會始

毎春翫松梅

咲く梅も散りうせずして色まされ松にあひおひの年々のはる

同年二月十二日當座御會

初春

初春のふしにあふ庭にきこゆるは國栖のおきなの笛竹のこゑ

同月十九日當座御會

春日

うちかすみ行くこと遲き春の日は老せぬ門の名にめぐるらむ

同年三月二十四日月次御會

春興

みねの花ふもとのつばなつく〳〵し心あかれぬ春にこそあれ

同年五月五日當座御會

菖蒲

めぐりくる五月五日の節はへて軒ごとにふくあやめぐさかも

これは「さつきいつかあやめをもてあそぶやまとうた」

の二十字を分ちておのゝ〳〵初句の頭におきて菖蒲の歌二十首をよめる中に「め」の字を頭におきてよませ給へるなり

同年八月九日當座御會

關郭公

なれもまたむかし思ふかほとゝぎす名のりて過ぐる朝倉の關

同年九月三日當座御會

相互思戀

わが中はしづのをだまきくる絲のかたよりならぬ思なりけり

同四年二月十一日御會始

春雪散風

梅かをり青柳かすむ春ながらゆきやいつまでかぜに散るらむ

同月廿三日當座御會

初春

もゝのつかさ民の家居も春に明けて營む業ぞのどけかりける

同年四月廿一日當座御會

池螢

池水のみぎは涼しきひかりこそ玉藻にすだくほたるなるらめ

同五年正月十八日御會始

春來日暖

この國は日の本なれば日かげより花うぐひすの春ぞ見えゆく

同年二月十五日賜大樹（德川家慶）六十賀

鶴契千年

ふかみどり松の大樹のかげしめてやどれる鶴や千世の友かも

同年後二月四日當座御會

柳帶露

絲ざくら咲くかと見しは花ならでしだり柳にむすぶしらつゆ

同年三月廿二日當座御會

戀燈

物おもふわが影さへも人や來とまよふはつらき閨のともし火

同年四月廿一日當座御會

新樹露

夏ふかくしげりそひなばうしけれど今の若葉の露はすゞしも

同年十二月十五日當座御會

早春

世は春のこゝろのいろにやはらぎて松風かすむすみよしの浦

同六年正月廿四日御會始

松契春

しきしまのつきせぬ道は松が根の苔むすまでとちぎる春かな

同月廿八日當座御會

霞中鶯

うぐひすのありとやこゝに聲はして見えぬはふかき春の霞か

同年三月十七日當座御會

社頭月

ところがら影すみよしの神がきや月にはかゝる雲きりもなし

同年五月十二日當座御會

冬植物

冬の來てこきむらさきの霜の菊うつろふ色もまたあかず見む

同年八月廿三日當座御會

秋雨

詠めつゝ思ふも淋し秋の雨の降るがまに〳〵木の葉ぬれけり

同年九月八日當座御會

煙

朝な夕な民のかまどのにぎはひをなびく煙におもひこそやれ

安政元年正月十八日御會始

春山成興

おもしろや霞に春をそめなして咲かぬさくらもみよし野の山

同年三月十一日神宮御法樂　去月御延引

寄神祝言

言の葉のたむけうけてよ國民のゆたけきことを神もおもはゞ

名所鶴

朝づく日さしそふ影も伊勢の海のきよきなぎさにたてる友鶴

同月十五日石清水社御法樂　去月御延引

立春

天の戸のあけてのどけき朝日かげやはたの山に春は來にけり

杜月

枝しげき杜の木末もさやかにや月のかつらのひかりそふらむ

同月廿一日内侍所御法樂

霞映日

ちはやぶる神代の春の立ちかへり日影うらゝにかすむ空かも

松藤

散りうせぬ松をはふ木にちぎりつゝいつより咲くか藤波の花

同月廿二日鴨社御法樂　去月分

社頭鶯

春のいろは今ぞやはらぐ神垣にうぐひすうたふ聲ものどけし

冬夜

うば玉のよすがら冬のさむきにもつれておもふは國民のこと

同日賀茂社御法樂　去月分

雪中梅

降る雪を花にかさねて梅が枝のいろはわかれずにほふ春かぜ

夏川

世を祈るこゝろは神もくみしるや賀茂の河原の夏のすゞしさ

同年六月十一日神宮御法樂

柳

うちなびく柳の絲のすなほなるすがたにならへ人のこゝろは

同年後七月十一日神宮御法樂

磯千鳥

風たえて波こゆるぎの磯千鳥しづかなる世をつぐるこゑかも

同月十六日御遊御當座

秋聲

こゝもなほおなじ末ぞと春日野の秋にかはらず蟲の鳴くこゑ

同月廿七日御遊御當座

草露如玉

龍田姫かざしの玉もけふこゝにみがきて見する草のうへの露

同年八月十一日神宮御法樂

名所萩

宮城野の萩が花見むかさなくてわがころもでは露にぬるとも

同年十一月廿四日當座御會

初春鶯

春くるとたれに問はでも鶯の鳴く音よりこそまづ知られけれ

同年十二月廿三日御遊御當座

寒松

かさゝぎの霜の橋ならでさむけくも松てふ松に風わたるなり

祝言

よばふなり立ちならぶ木に吹く風もうべこの殿の千世のゆくへを

同年の御製とて子爵六角博通所藏の叢書の中に見え

たる

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこゝろにかゝる異國の船

同二年正月十八日御會始

陽春布德

天地のよろづのみちのなれるよりつれていろます春やいく春

同月島津齊彬に授けたまひたる

寄國祝

ものゝふも心あはして秋津洲の國はうごかずともにをさめむ

これは御懐紙に宸筆染めさせられて下し賜ひきとぞ

同年二月十四日紫宸殿代右大臣藤原忠熙第に渡御櫻花を見たまひて忠熙にたまひける

安政二年きさらぎなかの四日かねて約し置きたる近衛の亭に行きむかひ名にしおふ絲ざくらを見て

昔より名にはきけども今日みればむべめかれせぬ絲ざくらかな

見れどあかぬ風をすがたの絲櫻はなの色香はなが〳〵し日もおのづからこゝろも花に匂ふまでいとに櫻のさきつゞくころ

青柳の千すぢのいとに香をこめて咲くかと思ふ花のいくもと絲ざくらいとながき日もくりかへし風のまに〳〵なびく花房

午の時ごろよりとき〴〵雨ふりければ

これもまたあかぬながめとなりてけり櫻がいとにかゝる春雨

いとざくらいとよりかけてふる雨に花の色香もそふ心地せり

また〳〵雨は晴れて日かげも花の上に照りそへば

村雨のはれゆくあとに春の日や花のひかりをみがき添へつゝ

春雨の晴れゆくあとのいとざくらかずそふ花や露のしらたま

黄鳥小蝶など花にたはむるゝもまた興ありて

花の香をめづるこゝろか絲櫻いとのどかにもあそぶこてふは

絲ざくら枝づたひするうぐひすのおのが羽色は若葉とも見ゆ
咲きつゞく花の色香をしたひてや絲にみだるゝ春のうぐひす
夕景にもなりぬれば酒のたぐひとりかはし今日は
めづらしく男方を召寄せ花の宴催さすときに右の
おほい臣より數々儲物ありければ喜のあまりかく
ぞありける
花のときあふてふさへもうれしきを心づくしの人のなさけは
高坏に菓子肴物など盛りありその取合せ松藤の作
りものありけるを見て
今日こゝに千代を重ねてたつ松に契りてめぐれ春のさかづき
松藤の立てるすがたを種としてことばの花も咲きさかゆらむ

夕景にもなりて猶更空もとく晴れ日影もうつろひ
しけしき又たぐひなければ
花のうへに夕日のかげのうつろひてさらに色まさる庭の面かな
日の影はをさまる頃の花の上をさらにてらして出づる月かな
色みえぬたそがれ時の花のうへにほのめきわたる今日の月影
追々にぎ〳〵しく盃もへだてなくめぐりて
やはらぐる人の心も花ゆゑとなほよをかけてめぐるさかづき
とく暮れて月の光そひさやかに花をてらすけしき
又たぐひなくおぼえつゝ
けたれけむ春の夜ながらかすまぬは月もさくらの花の色香に
まことに雪月花ひとつのけしきのおもしろさに

雪とのみこずゑに花のさく色もみがきそへたる月のかげかな

それより庭へおりたち木のもとにうちつどひて

木のもとにうちつどひつゝながめても心の花のいろは匂はず

月のかげ花のひかりもいやまして春とは見えぬ庭のおもかな

おもしろやさすさかづきに影みえて月もかすまぬ花の下かげ

なにごとも思ひわすれて月のかげ花の色香をさらにめでつゝ

雪かとも見ゆるばかりに咲きみちて庭の色そふ花のうへの月

又もとの所へかへりつゝ盃のめぐるあまり人々手

折りし花を冠にかざす我にも右のおほい臣のかざ

して

さかづきのめぐれるまゝに庭櫻手折りし花をわれもかざしつ

たもとにも匂ひとゞめむ手折りつゝ花をかざしてうたふ宮人

何かとながき酒宴になりぬるほどに

歸るべき家路わすれていつまでも花にめぐらす春のさかづき

程なく警固もそろひぬれば名殘をしくもかへらむ

とて

いつまでも何忘るべきこの殿の花さくら木の今日のながめは

名殘あれやあかぬ心を木のもとの花にとゞめてかへる夜の空

これは宸筆にてかず〳〵の御製を記させたまひてそ

のあとに「安政二乙卯年仲春仲四日於陽明家感花宴面

白慶悅之餘詠之百廿二代孫御名」と記されて下し賜へ

るものにて今に同家に秘藏せられあり

同日御遊御當座

絲櫻

絲ざくら春の手引の永き日もくりかへし花のながめそへつゝ

春懐

みな人のこゝろも花の紐とけてへだてぬなかの春のさかづき

同日御遊御當座　後座

花映日

咲く花に空もかすみて香に匂ふ日かげのどけき春べなりけり

同年三月四日御遊御當座

惜花

散らずもあれ花はいく春かはらねど今年見はやす我を思はゞ

同月十五日御當座

樹陰卯花

生ひしげり月さし入らぬ木のもとにまがふ光や咲ける卯の花

同日御當座　後座

躑躅

へだてなく内までてらす岩躑躅花に谷かげもそむけてぞ見る

これは「やりみづのながめをそへてつゝじさきつゞく」の二十字を分ちておの〳〵初句の頭におきて躑躅の歌二十首よめる中に「へ」の字を頭におきてよませ給へるなり

同年五月九日御遊御當座

郭公過

朝倉や木の丸どのにあらずとも名のりて過ぎよ山ほとゝぎす

同月十二日新内裏中殿小御所の障子に題せさせたまひける

音羽山　弘徽殿

霞わたりたる高根に朝日のどかに出でたり
あらたまる春のひかりに出づる日の音羽の山は霞みそめつゝ

小鹽山　萩戸

峰ふもと小松に雪のつもるところ
をしほ山ふもとの雪にみわたせばひとつにしろき峰の松ばら

伊勢海　藤臺

浦波さむき月に千鳥たつ鳴くもあり
伊勢の海やさゆる波間の月影にところなれつゝ千鳥なくらむ

玉河里　鬼間

河ぞひの里の垣根に卯花咲きつゝ
しろたへの涙にうつして玉河のさとの名みがくかきの卯の花

住吉浦　朝餉

浦近く菊さきて霧の松陰に鳥居も見ゆる
住吉ときくも千とせのさかりをばうらわの松に契りてぞ咲く

元日節會　小御所上段

豐樂殿の臺盤に宮人つきゐて庭上立樂の體または
るかに祿の辛櫃の立てるも見ゆ

あらたまの年のはじめのよろこびを臣にかさぬる廣はたの絹

芳野山　同上

花ざかりのところ

散りもせず咲きものこらぬ盛をばいくその春にみよしの丶山

蟲えらみするところ　小御所西廂

八千ぐさの花ずり衣いざやきて嵯峨野に秋のむしえらばさむ

同月廿八日御遊御當座

述懷依人

深き淵うすき氷のいましめに日々に我が身をかへりみつ丶も

同年七月十九日

擣衣

あはれさもいはむ方なくきこゆるは賤が夜寒のきぬたうつ聲

同月廿七日

祝

殿つくるその聲々のにぎはひを聞くにたのしき千代のゆく末

同八月九日

櫻柳交枝

佐保姫の手引のいとの青柳になびくさくらやそでのぬひもの

同年九月廿日御遊御當座

秋庭

おもしろや庭の山にも四方やまの秋のけしきをうつす今日かな

同月廿一日内侍所御法樂

霧隔行舟

異國のふねも見わかずへだつるは神のこゝろの霧のうなばら

同年十月七日御遊御當座

紅葉留人

もみぢ葉のあかぬあまりに思はずもしばし〳〵と時ぞ移れる

同月十四日

落花風

吹くからに風のしわざと恨みけりおのれと花のちるもまじるを

同年十二月十八日

花雪

雪ならば匂ふ春日に消えぬべしきえぬや花のさかりなるらむ

同三年正月廿四日御會始

天晴有鶴聲

あさ庇日影うらゝに空見ればさもうれしげにたづ鳴きわたる

同月廿九日當座御會

早春山

あしびきの山の白雪しらぬまに春のけしきとはやなりにけり

同年二月十五日御當座

春居所

わがやどの北なる殿の絲ざくらこぞの昨日やおもひ出でつゝ

雜植物

松竹は千年のものよしかはあれど冬木せぬ木の蔭もあかれず

同年三月八日御當座

幸逢太平代

治めてしその御代よりの惠うけて我もたのしき時にあふかな

同月十八日御當座

浦卯花

あびきする浦の苫屋の卯の花は波のぬれぎぬほすかとも見ゆ

蟲吟露

秋もいまつゆ深草になく蟲はこゑおのづからうるほひにけり

同年四月四日御當座

牡丹

移し植ゑしことしをはじめ深見草さきそへ花の色もかはらず

夜をかけてめぐる盃とり〳〵に人のめづてふ名とりぐさかも

これは「うづきはじめのよつかこゝのへのふかみぐさ

えもいひしらぬさかりをみてひとびとつどひてよむ

やまとことのは」の五十字を分ちておの〳〵初句の頭

におきて牡丹の歌五十首よめる中に「う」と「よ」とをよま

せ給へるなり

同年五月十日御當座

渡時雨

舟人の苫ひきおほふひまもあらずしぐれぞわたる淀の川づら

述懷

おろかなるわが身もともに人なみにまじるはづかし敷島の道

寄世祝

天地の神のめぐみにまかせつゝ猶やすき世にあふかたのしさ

同四年二月廿四日御會始

迎春祝代

ひじりなる御代をまなびに我世にも治まる春と四方に迎へむ

同年四月廿三日本願寺東門主光勝にたまひたる

本願寺前大僧正光勝の庭の梅のよし折りて見せけるをめでゝよめる

折りて見する人のこゝろも淺からぬ梅の立枝の花にこめつゝ

同年後五月十一日御當座　於聽雪

樹蔭流水

ときは木のかげをながるゝ水の音に心すゞしき庭のおもかな

夏祝

夏びきの手引のいとの末ながくすみなすことや松にちぎらむ

同年八月七日賀茂社御法樂　去月廿四日分

秋夕傷心

わがおもひゆふべとだにも限らねどまして心をくだく秋かな

同五年正月十八日御會始

緑竹辨春

うぐひすの聲にほはせよ春やとき花より竹のみどりそへつゝ

同年三月五日近衛左大臣にたまひたる宸翰のおくに

さくら咲く花のあたりは春ながら心にそまぬいろ香なりけり

同年七月十一日神宮御法樂

述懷

神ごゝろいかにあらむと位山おろかなる身の居るもくるしき

同六年正月廿四日御會始

春風春水一時來

春としもみねの松風かよふより波のつゞみのしらべあひつゝ

同年四月九日鴨社御法樂

葵露

卯月來ぬあふひばかりか民草にかゝるめぐみの露やかけてむ

同年六月十五日石清水御法樂

祈戀

わが命あらむかぎりは祈らめやつひには神のしるしをも見む

同年七月廿七日內侍所御法樂　去廿一日御延引

寄風述懷

こと國もなづめる人ものこりなくはらひつくさむ神風もがな

同年十一月廿日鴨社御法樂

冬日

あるはしぐれあるは雪げに曇りても本の光はいつもかはらじ

萬延元年正月廿四日御會始

心靜酌春酒

春の日のひかりさしそふ酒の水ちるをならはぬ花のさかづき

文久元年正月廿四日御會始

萬物感陽和

時をしる春の心はこれをながめかれを聞くにも殘るかたなき

同年六月二日長門藩主毛利慶親の臣長井雅樂を以て

慶親へたまひたる

國の風ふきおこしてもあまつ日をもとの光にかへすをぞ待つ

同年七月廿四日月次御會

白露

おごるとはつゆもおもはぬわが庭にたが白金の玉をまきしぞ

同年八月廿四日月次御會

一聲山鳥

鳴くからはいま一聲も二聲ももらせやもらせやまほとゝぎす

同年十一月十四日内侍所御法樂

朝述懷

ねがはくは朝な〳〵のことのはをあはれみうけよ神ならば神

同年十二月薩摩藩主島津茂久その族島津久光が御劍

を奉りける志をよみせられて下したまひたる

世を思ふ心のたちとしられけりさやくもりなきものゝふの魂

島津家藏宸筆御製のはしがきに「文久はじめの年季冬

物部の忠魂磐石をもつらぬく利劍おこせる事時世に

あたり實に憂患をはらふ志とたのもしく思ひつゝよ

める和歌」とありてこの御製をしるさせ給へり

同二年正月十八日御會始

風光日々新

日にそひて風のしらべも梅が枝にきゐるうぐひす長閑なる春

同年五月廿一日内侍所御法樂

絲櫻

絲櫻いとくりかへし世をおもふこゝろの花はうつろひもせで

同年六月十五日石清水社御法樂

夕立過

過ぎてゆくこの夕立のそら見ればこゝろの雲もたゞ時のまか

同月廿一日春日社御法樂

社頭夏月

すゞしさをたのむねがひもみかさ山神のみまへのこの夏の月

同年七月十六日内侍所御法樂

述懷

うれしさの思は猶もまされかしまさるまじきは世の憂き事よ

同年八月十二日賀茂社御法樂

露染山紅葉

時くれば山のもみぢも色に出づわれにも露のめぐみあらなむ

同月廿三日鴨社御法樂

神樂

心をばこめてうたへよ神樂人かゝりける世をしるもしらぬも

同年九月十一日春日社御法樂

寄風述懷

異人とともにもはらへ神風やたゞしからずと我が忌むものを

同年十月十六日石清水社御法樂

薄風

夕嵐ふくにつけても花すゝきあだなるかたになびくまじきぞ

同月十七日

浦千鳥

浦づたふ千鳥につれてよゝの爲まことたゞしき人をえまほし

同月十八日鴨社御法樂

寄忍草戀

みちのくの忍ぶもぢずり亂るゝはなれ故ならず世を思ふから

同年十一月三日内侍所御法樂

述懷

神ならばわが心をもしろしめしひたすら願ふことをうけませ

同月十一日神宮御法樂

寄氷述懷

天地にみつるさむさのあつ氷あつくもおもひつくすねがひよ

同年の御製とて久邇宮所藏の叢書の中に見えたる

砧

うたでやむものならなくに唐衣いくよをあだに猶おくりつゝ

同三年正月十一日神宮御法樂

浪澄鶴影浮

世のことは心のまゝにすみゆくかなみ〳〵ならぬ鶴の影み

同月廿四日御會始

新鶯竹裏啼

ふしなれて千代もさへづれすなほなる竹をまなびのひなの鶯

同年三月五日鴨社御法樂

春人事

この春は花うぐひすも捨てにけりわがなすわざぞ國民のこと

同月廿三日内侍所御法樂

薄氷

おろかなる心はさむしうす氷あやふきのみに世をわたる身や

同年四月九日鴨社御法樂

寄弓述懷

梓弓まゆみつきゆみ年をへずをさまれる世に引きかへさなむ

同日賀茂社御法樂

寄矢述懷

矢すぢをもつよくはなたむ時ぞ來ぬうべあやまたじ武士の道

同年五月十一日神宮御法樂

雨中郭公

五月雨の晴れぬおもひを時鳥なれもこゝろにかけてなくかな

同年十月九日守護職松平容保にたまひたる

たやすからざる世に武士の忠誠のこゝろをよろこびてよめる

やはらぐもたけき心もあひおひの松の落葉のあらずさかえむ